



アカヒメ

恵久地健一

自宅マンションの仕事部屋に立つヨウコは真紅の携帯電話を片手に、ほぼ全裸の格好でメールを打ち込む。

生まれたままの姿に加え二十七年の歳月が女性らしい曲線を作り上げた、細身の肢体である。パンツも穿かず、南国の無人島で全身を太陽の下へさらすような解放感でエアコンの冷気を浴びている。

めるめると、完成したメールを送信。

へねえ、イヌクン／悪魔と契約したんだけど、とりあえず何をやればいい？

手紙とポストのアイコンが消えた携帯電話を閉じたヨウコは、股間に貼りついた自前の毛を見下ろし、ふっと期待に満ちた笑みを浮かべた。

*

数時間前――

横幅にして、およそ三メートル。奥行きのない閉鎖的な空間である。

仕切りをへだてた浴室と隣接したトイレの中で、ヨウコこ

と赤瀬洋子は人生において最大級の危機に直面していた。淡いクリーム色の洋式便器を眉根にシワを寄せた難しい表情で見下ろし、腰に手を当て、半裸の姿で立ちつくす。

メラニン色素の少ない日陰育ちの白い足に鋭角の三角形にカットされた、黒いパンツ。上の裸身も同様に、日を浴びていない白い肌はロウソクのツヤを思わせる。脂肪分の少ない胸囲のなだらかな球形の境界線を際立たせるピンク色のゴム質は、二枚のヌードブラである。

作家にして漫画家という室内系ジョブの二刀流をこなす彼女は外出の頻度が少なく、服装にも気を使わない。まして今のように夏場の自宅ではノーブラでいることも珍しくないが、今日は午後には出版社の人間が原稿を取りに来るため、かろうじてブラをつけている。

締切の当日というのも問題といえは問題だが当面の危機に比べれば、そんなもの彼女には日常茶飯事である。

ヨウコはパーマを当てた髪を片手でかき上げ、ため息を吐く。「二週間前に美容室で「アンジェラ・アキみたいに」と注文した長い髪は手入れをさぼり気味の現状でも、美容師の技量とパーマ技術により綿毛状のカールを維持している。

「まいったなあ。パンツが脱げないと、こういうトラブルが起きるのか」

ひとり呟き、パンツを穿いたまま便器の上にごがりとお尻

をのせる。

そう、パンツが脱げないのだ。

問題はその現状で、彼女が尿意に耐えていること。否、突きつめればそれも問題とはいえない。大きい方ならまだしも小さい方など、我慢の戸口に鍵をかけるぐらいなら、パンツを穿いたまま解放することもためらわないのが、ヨウコという女である。まして自宅のトイレというフィールドであれば、床を汚したところで誰が困るわけではない。

だがそんな女傑であるところの彼女がそれを実行できない背景には、パンツを汚せない理由がある。その黒いパンツは彼女の所有物ではないのだ。他人のパンツをしかも無断で穿き、どうしたわけか脱ぐことができない。その上さらに、おしっこがしたい。

それが問題だった——

*

状況を説明するため、さらに早い時間の朝入話を戻す。とはいえ前日の夕暮れに起床して夜通し原稿を描いていた彼女からすれば、一日のはじめまではなく昨日の後半に過ぎないが。

彼女の職場にして自宅である、「アキマンシヨン」『ベル

フォーレ猫がしら』の一階、一〇一号室。六帖の洋室に書棚や机を配置した仕事部屋。

イスに座るヨウコはスウェットズボンにTシャツという格好で机に向かい原稿を仕上げていたが、完成まで残り一枚というところで、手を止めた。へ後に回せることは今やらない。最後まで頑張らないくというのが彼女の生き様にかかけられた、座右の銘である。

ヨウコは小休止とばかりに素足でイスから落ち、床の絨毯に胴体着陸する。体を丸めて寝そべる視線が見せたのは、窓辺の床に積まれた洗濯物の山だ。

おとこの夜、マンシヨンのとなりにあるコインランドリーで洗濯して持ち帰り、袋から出したところで満足して床に放置したのだ。洗濯物を片づける気分が動き出した彼女は、のそのそと床の上を四つん這いで移動する。

「悪いとたちがやって来て♪ みんなを殺したああ——」
ヨウコは夜明けの心地よい気だるさでフランキー・ジェット・ティリーの『悪いひとたち』を小さく口ずさみながら、あぐら座りで洗濯物を片づける。

「女たちは犯され♪ 老人と子供は燃やされた——んっ？
この高そつな黒いのは、ボクのパンツじゃないような」

洗濯物の山から出てきたのは一枚の黒いパンツだった。それが後に人生の転機をもたらすフラグとも知らず、彼女は薄

地の三角形を片手に持ち上げ、しげしげと目の前にかかげた。とはいえパンツが混入したことはない。彼女自身も洗濯物を引き上げたときに気づいていた。持ち主の見当もついていたのだが、それを返すという行動が実行されず後回しにされたわけだ。

「ああそうか、ミキサンのだ」

ミキサンというのは彼女の部屋から斜め上に住む二〇二号室の女性だ。表札の表記は、湯谷。下の名前は美姫と書く。

「返すにしても、むぎ出しのままを持って行けないか。袋が何かに入れてカモフラージュした方がいいのか?」

ヨウコはパンツを裏返し、製品表示のタグを仔細に眺め、思案にくれる。

多くがひとり住まいの『ベルフォーレ猫がしら』において、ヨウコよりふたつ年上のミキサンこと湯谷美姫も独身であり、となりのコインランドリーをよく利用している。ヨウコが出かけた夜も、入れ違いで洗濯機を回していたのが、ミキサンだ。そして彼女と同じボックスに洗濯物を放り込んだヨウコは、中に残された黒いパンツを発見し、自分の洗濯物と一緒に持ち帰ったのである。

「今の時間だとミキサンは仕事か。というか、今何時だ?」
サンづけの愛称で呼ぶように、赤瀬洋子と湯谷美姫の両者は、おおむね親しい関係にある。というのもミキサンは近所

の美容室で働いており、ヨウコはその常連客である。彼女がヨウコの髪を整えることもある。ただ美容室で会話することはあっても、おたがいに外へ呼び出して遊ぶほどの関係ではない。

それでも、おなじマンションの住人では唯一ヨウコが交流を築いた人間といえた。元々がいくら自分に有益をもちたらず人間でも、興味がなければ会話もろくにしない性格なのだ。

人嫌いとは少し違う。好みの男性店員がいる本屋で本を買い、わずかな買い物でも好みの女性店員がいるコンビニまで出かける。彼女の思慕は打算のない純粋な親愛に直結しており、ひとつ年下の元恋人で、現在は印刷資材会社の営業マンであるイヌクンこと犬松夏雄は「超自我で行動する人」と評している。

携帯電話の画面に表示されたデジタル表記の時刻は、八時二十三分だった。

机の上に携帯電話を置いたヨウコは、パンツを手にしたまま立ちつくし、天井をあくぐ。視線は斜め上、ミキサンの部屋がある位置だ。電話で伝えてから渡した方がいいのかと、彼女はミキサンの顔を頭に描きつつ考える。

肩口までのストレートヘアに麗人たる顔立ち。均整の取れた長身に、美容師のエプロンをぱりりと着こなす姿はクール

ビューティと形容するにふさわしいが、話す口調はおだやか。ヨウコの『お気に入り人物／＼近所部門』でも、かなりの上位ランカーだ。

「……とりあえず穿いてみるか」

思案の末、彼女の頭脳から飛躍した結論が打ち出される。方針が決まれば行動は早い。スボンとパンツを一緒に脱ぎ、ついでにTシャツも脱ぐ。ミキサンのパンツに足を通し、お尻のデリケートラインにパンツの位置を調整する。

「おおおう。なんというか、おそろべレフィット感」

裸身にパンツを穿いたヨウコは壁際へ置かれた姿見の前へ移動し、鏡越しに自分の体を眺める。ときおり「ほほう」などと頬を紅潮させて唸り、体のポーズを変え、鏡の前でぐるぐる回る。

「うん、これは撮影しておこうか」

べつに自分の恥ずかしい姿を撮影して公開する趣味があるわけではない。彼女は創作の資料を撮影するためにデジタルカメラを所有している。姿見にしても外見を気にするより、漫画を描いたさいに登場人物のポーズを確認する目的で使われることの方が多い。

ミキサンのパンツを穿いたのも単純な興味と好奇心であり、セクシャルな意味合いはない。あるとすれば憧れの対象を身近に感じたいというフリークスの願望だが、それでも好意の

対象が無差別なだけで特殊な性愛癖があるわけではない。

「毛は出てないよね」

ヨウコは両足を開き気味にして首を下に向け、股間を覗き込む。途端に顔の紅潮が首筋まで広がり、鎖骨のあたりまで肌に朱が差す。自分の赤裸々な姿を色々な人に見られるストリップの気分を想像し、ふいに自意識過剰気味の羞恥心が湧いたのだ。

「服着よ……」

恥じらいに誘発された欲情から、セクシャルな獣が穴ぐらの奥で頭をもたげるのを感じ、ヨウコは元の服装へ着替えることにした。

異変に気づいたのはその直後だ。

「ん？ きついのか」

ヨウコは腰と首をひねりパンツの穿き際に視線を向けるが、肌に食い込んでいる様子はない。だがどうしたわけか、生地が肌と一体化したように貼りつき、脱ごうにも指に引っかかりがない。

「ふんう、高い下着だところいうもんなのかね。暴漢に脱がされにくい淑女仕様とか、肌の一体感とか」

ただマイペースな性格の利点として、彼女はこうした事態に動じることを知らない。いかなる事態であれ、自分が体験していることなら異常でも不思議でもなく、実際に起こりえ

る正常な現象としてとらえてしまつたのだ。

たとえば目の前に天使が現れ「今から一時間後に世界が滅びます」と告げたところで、彼女なら「へえ」と一言で応え「じゃあ、それまでボクと一緒にゲームでもやらない？」などこと返すだろう。

とはいえパンツが脱げないのは、いささか彼女を困惑させる事態ではあつた。

「何だろ、べつにヒモで穿いているわけじゃないし。脱ぐ方法があるのか？」

パスカルの原理により内気圧と外気圧の差で炊飯器のフタや、お味噌汁のフタが開かなくなる現象。水をぎりぎりまで入れたコップに紙のハガキでフタをすると、逆さまにしても表面張力の影響でハガキが取れず、水が落ちない現象。

などと独自の物理法則を並べ、ヨウコはパンツを脱ぐ方法を考察してみるが解決には結びつかない。指で引つ張れば生地は肌から浮くのだが、腰に穿いた部分が動かないのだ。

「あ、まずい。トイレ行きたい」

そうこうしているうちに尿意を感じ、パンツが脱げた場合すぐ処理できることを考え、とりあえずそのままの格好で仕事部屋を抜け出し、問題の解決をトイレの中へ持ち越したのだ。

*

ワイド型テレビ画面ほどの大きさがある水槽の底に浅く泥が敷かれ、水中に揺らぐ水草の間を一匹のウナギが脊椎をくねらせ、ゆるやかに泳いでいる。

下着姿のヨウコはその様子を眺めながら、彫像のように硬器へ腰かけていた。ウナギは彼女のペットだ。バスルームの脱衣所に置かれた水槽の中で飼育し、その生態をほんやりと観察しながら用を足すのが彼女のトイレ習慣だった。

著名な彫像、オーギュスト・ロダンの『考えるひと』は造型の美しさを表現するためのポーズで実は何も考えていないという話だが、彼女の頭脳は問題の解決へ向け明確に思考を働かせていた。

「そついえば内田春菊先生の漫画に『呪いのワンピース』ってあつたな」

一枚のワンピースをモチーフに、それを着た女性たちが、さまざまに狂気に取りつかれ、あるいは脱ぐことができなくなり発狂するというホラー漫画だ。

さすがのヨウコも呪いの存在は認めていない。少女時代に嫌いな男性教師の毛髪を手製のワラ人形に仕込み、ために極太のクギを打ち込んでみたが、男性教師の体には何の影響

もなかった。以来、彼女の中で呪いはフィクション上の存在として認識されている。

だが理由はどうあれ、彼女の穿いたパンツはまだ脱げない用を足すこともできない。両脇の裏にある毛穴から、暑さとはべつの汗が出る。

「切っちゃえばいいんだよね……」

解決策はすでに出ていた。ハサミでもナイフでも、パンツの生地を切るなり破くなりすればいいのだ。

それでも、しかしだ。やはり他人の所有物であることが倫理的な葛藤を生む。まったく知らない人間なら彼女は気にしないが、顔見知りの持ち物である。

「うー、どうすつか、な」

顔にわずかな苦渋を浮かべ、両足の指をもじもじと擦り合わせる。下半身の方も、そろそろ忍耐力が極限に近い。

人間である以上、彼女にも我慢の限界はある。どうせ下着を汚して穿けなくするなら、切って駄目になるのもおなじだ。と誘惑をささやく声がある一方で、我慢を続けねばいかにパンツが脱げて解決するかもしれないという希望的な観測も胸の奥にある。

「よし、切って知らばっくれよう」

やおら決意を固めてヨウコは便器から立ち上がり、トイレを出る。

「ミキサン、すまん」

脱衣所の水槽に片手で手刀を切り、ミキサンに見立てたウナギに謝罪する。

ハサミとナイフなら、彼女の仕事机に置かれていた。仕事部屋へ向かおうとバスルームを出た、そのとき。

——ピン、ポピン、ポン♪

訪問を告げるチャイムが、バスルームを出てすぐ横の玄関で鳴り響いた。

「はい、はい」

ヨウコも反射的に返事をする。

「すいません、二階の湯谷です」

電話口で商品紹介をする女性オペレーターの落ちつきに好印象を加算したような声が、ドアの向こうから響いた。

「えっ……うえほっ、げほっ」

瞬間、ヨウコは動きを止め、出しかけた声が咳き込みに変わる。彼女が今穿いている、否、これから切り刻んで隠滅しようとしているパンツの持ち主——ミキサンこと湯谷美姫。

突然の本人訪問にヨウコはどうしたらいいか分からなくなる。玄関をへだてた鉄製の扉が威圧感を増す。自分の姿をあらためて確認すれば、今の彼女にそのドアを開けられるわけがない。

思わず、その場から一歩後ずさる。判断のつかぬまま方向

を変え、「こそ」と足音を立てずに廊下を引き返す。仕事部屋のドアを抜け、ほうと一息。

「あーもう。何だろ、この漫画みたいなタイミングは」

床に落ちたTシャツとスウェットズボンを拾い、急ぎ身につける。姿見の前で髪を手ぐしで直し、ウエットコットンで目の下と顔を拭く。机から対人用の眼鏡を取り上げてかける。近視気味の彼女は目を細めて目つきを悪くする癖があるため、人と会うときは眼鏡を利用する。

「……よし、頑張れ」

身支度を整え、尿意を耐えつつ、ヨウコはちからの抜けた声で自分を励まし、部屋を出る。返事をした以上、居留守は使えない。ほかの人間なら無視するところだが彼女の性格上、お気に入りのミキサンを相手にそれはできない。

「センチメンタルな北京ダック」 悲しげな顔もできずに死んだ——」

歩行を鼓舞するマーチとして、後頭部の引き出しからブランキー・ジェット・シティーの『スイート・デイズ』が自動的に選曲され、ほとんど声を出さず口の形で再生する。歩く重心が股間に寄ると戸口の鍵が外れそつだ。

「そうしたら悪魔」 笑っていたよ頬紅つけて——」
そして彼女は玄関の鍵を外し、ドアノブに手をかける。

ドアを開けた先に立つミキサンは、美容室で働いているときとおなじ姿勢でたたずんでいた。

「ごめんなさい、こんな朝から」

口調のおだやかさも変わらない。ただし服装は美容師の工ブロン姿ではなく、光沢のある黒いシャツに白いズボン。黒い髪だけを見れば日本人の彼女だが、目の大きさや鼻の高さにコーカソイド系の血を感じさせる。鼻の形を三角に描く少女漫画のような顔立ちだ。

「本当にいきなりで、お仕事の邪魔じゃなかったかしら」

彼女はヨウコの職業が作家であることを本人から聞かされているのだ。

「あ、いや、全然……」

「じゃあ少しだけ、話をいいかしら？」

「ええ、大丈夫。全然」

本当は危機一髪の状態だが、ヨウコは動揺を後ろに隠しつつ、控え目に申し出るミキサンを玄関へ招き入れる。

ヨウコよりも身長のあるミキサのだが靴脱ぎ場の段差があるため、向き合う両者の視線はほぼ同じ高さだ。

「実は、聞きたいことがあるの。おとこの夜だけど、あなたコインランドリーにいたのをおぼえているかしら？」

わずかに浮かぬ表情を見せ、ミキサはお腹の前で手首を重ねるように腕を組み、用件を切り出す。

「たぶん、そのときだと思っただけで、わたしの下着が一枚もないの。もしかしたら、あなた見てないかしら？ わたしが空けた場所を使おうとしていたから、近くに落ちていたとか、中であつたとか」

大ピンゴ——ヨウコの背中に書かれた文字が「絶対絶命」の四文字に変わる。電車の線路に縛りつけられ、向こうから猛スピードで列車が来ている状態だ。

「下着、ですか」

「ええ、黒のショーツなんだけど」

ミキサンの言葉を聞くたびに、ヨウコの希望が次々と断たれる。まさか彼女も目の前にいる知り合いがそれを穿いているとは思わないうら。あと一時間早く彼女が来れば、あるいは早急にパンツを切り捨てる判断を下していれば、少なくとも下半身の緊急事態は回避していたとヨウコは後悔する。

「いや、ごうだつたかな。たぶん、見なかつたと思っただけ」
髪が生え際から粘度のある汗が吹き出し、ヨウコの頭皮から熱が奪われる。

「そう、ありがどう。ごめんさい、くだらないことを聞かされて」

「いえ、実はあれから仕事が忙しくて、あの子の洗濯物をまだ整理してないんですよ。なんで、ひょっとしたらボクの洗濯物に紛れているかも」

ヨウコは後ろめたさから早口気味に言葉を発し、会話を打ち切るタイミングを逃す。急にストローを挿した紙パック飲料からジュースがこぼれるように、人間は焦るとつい余計な言葉が出る。

「あの、なんで、洗濯物の中にあるかもしれないし、あとで探しておきますよ」

歯切れの悪いヨウコの言葉にも、ミキサンは律儀に微笑みを返す。発言をしていないときの彼女は実に魅力的な目をしている。相乗効果で顔の肌が透明度を増し、輝いて見えるのだ。それでもまだ、帰るそぶりは見せない。

極限の状態も手伝い、会話を打ち切る言葉を探せないヨウコは、メガネの下に人さし指を入れ、目の下をこする。

基本的には傍若無人な彼女だが、その強さは他者への無関心さに起因する。外出もせず限られた部屋の中で限られた人間としか顔を合わせない生活のため、自我が強力に拡大している。作家である彼女にとって、外の社会は自分の創作した作品の世界よりも現実感がなく、関心がなければ石ころどううと生命体だろうと同じあつかいだ。

その一方、ミキサンのように対個人として認め、好意の対象として接点を作ろうとしている人間には弱い。自分のペースで徐々に自我の一部として取り込めればいいのだが、相手から距離を詰められると身動きがとれなくなる。

よつするに純情というか、対話のスキルが好きな相手に意思を伝えることのできない子供並みなのだ。

しばし沈黙のまま、いよいよ下半身の負荷に対するヨウコの我慢が苦痛の域に達する。そして「あの」と先に話を切り出したのは、ミキサンの方だった。

「実は、もうひとつ話があるの。あなたならたぶん信じてもらえろと思うけど。わたしにはあなたが、わたしの下着を穿いていることが分かっているの。それで今、困っているんですよ?」

「えっ、まさか超能力者ですか?」
冗談ではなく本気の口調でヨウコは返す。彼女の中学生時代、同級生に他人の心を読み取る超能力者の少女がひとりいたのだ。少女と友人だったヨウコは、当時その秘密を打ち明けられた数少ない人間であり、以来彼女の中で超能力は実在するものとして認識されている。

「いえ、わたしは悪魔だけだ」
ミキサンの言葉に、ヨウコの脳内を冷たい風がひゅうと吹き抜ける。

「ええと、悪魔を崇拝しているとかじゃなくて、神さまとか悪魔とかの?」

「ええ、悪魔です」
美容室で「六千二百円です」と料金を告げると変わらぬ

口調で彼女は返す。

狂信者、毒電波、サタニストなどという単語がヨウコの頭を埋めつくし、黒い虚構と混沌の渦からへこれは本物だという光り輝く真理が浮かび上がる。

「てことは、ミキサンが悪魔で、やっぱり角とか羽が生えてるとか?」

黒山羊の頭、コウモリの羽。

「ええ、角はないけど、羽と尻尾なら」

「それは、凄」

ヨウコの自我がアメーバのようにつこめく。彼女は世界の胡散臭いものと如何わしいものを愛している。そして彼女の周りには、それらの存在が自然とあふれている。超能力、幽霊、怪物の未裔。宇宙人以外の未確認生命体と超常現象ならだいたい過去に遭遇している。さらに、家に入れば新興宗教の勧誘に來た男性と話し込み、外に出れば救済の祈りを捧げる相手を探す女性に呼び止められ、一緒に近くの通行人を捕獲する。

ヨウコは多くの経験を通じて鍛えられた感覚から、「自分は悪魔です」というミキサンの言葉が真実であることを直感する。ヨウコの目から見た彼女の表情と口調には、まがい物の明るさを取り繕う違和感がない。

その認識が単純に、脳内の構造が少々エクセントリックな

女流作家の主観に過ぎないとしても、目の前に存在するものさえ信じてこのできない人間の目に比べれば、正しい感覚といえるだろう。

*

悪徳と魔性と美の人であることを自称したミキサンは、『ベルフォーレ猫がしら』——〇〇号室の玄関にたずみ、家主であるヨウコへ次のように説明した。

「羽や尻尾があるといっても、この体は人間の姿を借りているの」

彼女は自分の体を優しく抱くように、片手で服に触れながら話を切り出す。

「でもこの世界——わたしたちは辺土と呼ぶけど。ここには悪魔と敵対する神側の存在もいるし、中には感覚の鋭さから悪魔の実体を見抜く人間もいるの。それで今の方法として、人間の姿を借りた上に極小の魔力を込めた服を着て、悪魔の気配を完全に消しているわけ」

「はあ、なるほど」
「おうするにボクの穿いたパンツにも魔力が込められていたわけか——とヨウコは右足のすねで左足の太ももをこしこしと掻きながら、曖昧に頷く。

気のないそぶりだが、彼女が悪魔だという話を疑うわけではない。興味がないわけでもない。逆に興味津々で色々質問したいぐらいだが、いかんせん下半身の苦痛がヨウコの気を散らせる。

「あなたがわたしの下着を脱ぐことができないのは、そこに込められた魔力が干渉しているせいね」

見透かしたようにミキサンは告げる。思わずヨウコは、ズボンの上からお尻に触る。悪魔は何でもお見通した。

「えと、じゃあ脱ぐにはどうしたら」

「それなんだけど、まさかわたしも穿かれているとは思わなかったし。まあ、あなたが穿いた影響で、魔力を感じて探すことができたみたいだけど」

それは本当にすいません——とヨウコは顔を伏せ気味にして、もにゃもにゃと心の中で謝罪する。

「いえ、気にしないで。たぶん下着の魔力をわたしの魔法で打ち消せば大丈夫だから。ただもうひとつの問題として、わたしがあなたへ魔法を使うためには〈魂の契約〉を結ぶ必要があるの」

「契約ですか」

悪魔であるミキサンの能力なのか、もはや心に思うだけで部分的な会話が成立している。思考が筒抜けになるといっつのは通常なら非常に恥ずかしいことなのだが、ヨウコの頭は目

の荒いザルのように常識の束縛をふるい落とし、必要な真理だけをすくい上げる。

「悪魔がこの世界で魔法を使うのは、人間の求めに応じたときだよ。過去の歴史を見ても、わたしたちが自分の意思で人間に魔法を使用した話は一部の例外を除いてほとんどないの」

「それは、そういう決まりごとでも？」

「決まりというわけではなくて、わたしたちの意識的な問題なのだけだ。どう説明したらいいかしら」

ミキサンは買ひ物を選ぶ主婦のように片手を顔に当て、わずかに考え込む。

「たとえば、そつね。あなたの目の前に瀕死のエビが落ちていたとして、そのエビを助けるために全力で介抱したり、遠く離れた海まで運んだりする人間はいないでしょう？ 悪魔が人間に魔法を使うのはそれに近いことなの」

「ボくら人間は甲殻類ですか……」

「それぐらい意志の疎通に距離がある存在だということよ。魔法の行使はよつするに、思念の作用だから」

「ふんっ、シャープな見解だ」

人類を無脊椎動物あつかいするミキサンの言葉もひどい口ぶりだが、ヨウコは逆に悪魔らしい意見だと納得する。

古来の奇書に記された人間と悪魔の契約は儀礼的なもので

はない。存在のかけ離れた両者の距離を埋めるための契約であり、魂の一部を媒介し、感覚を共有するものだ、と、ミキサンは説明する。

だが契約の代償として悪魔が人間の命が求めることも、ヨウコは奇書から得た情報で知っている。作家のはしくれとして、それぐらいの知識はある。ただそれはこれまで彼女の中で空想の産物として認識されていたものだが、今は現実として悪魔が目の前に存在する。

「あなた、だいび辛そつね」

「うん、ロッシの限界。でも、まだ大丈夫。前にトイレを我慢しながら二時間の戦争映画を見切ったことがあるし……」

ヨウコは壁に片手をつき、声を震わせながら尿意をこらえる。ミキサンはその姿を見つつも「そつ」と、どこか上品ですら感じさせる口調で返す。

「それで契約のことだけだ。べつにへ魂の契約は、あなたの命を奪うことが寿命を縮めるとか、そういうことではないのよ。代償を要求することは確かだけど、それはあなたの死後、わたしたち悪魔に協力してもらおうだけ」

「協力、ですか」

苦痛に耐えるヨウコの目には、冷静なミキサンの姿が本物の悪魔に見えた。

「ええ、そつ。人間の死後、魂には二つの選択肢があるの。

人間に限らず、命を持つ存在のすべてに与えられる選択よ、ひとつは神側につくか。あるいは悪魔側につくか。そして、そのどちらも選べない場合は、もう一度この辺土に生まれて考える機会を得る。それは最後の命が選択を決定するまでくり返され、すべての魂が選択を終えたとき、次なる世界の覇権を賭けて悪魔と神の勢力による戦争がはじまるの」

「……あの、すいません。その話、まだ長くなりますか」

「簡単にまとめると、三つの選択肢がある中から『わたしが生きて死んだときは悪魔側の勢力に入ります』という約束を、生きているうちにしてもらおうわけ。スポーツ選手の契約みたいなものね」

「なるほど」

「悪魔が契約の代償に求めるのは、それだけよ。わたしたちは勧誘のために、こちらで活動しているセールスマンみたいなものね。承諾してもらえば、あなたの求めるままに魔法を使い放題」

「うーん——とヨウコは首を傾けて考え込む。途方もない話だが、彼女の人並み外れた想像力がそれを理解させる。

理解した上で顔をしかめる。どうにも自分が死んだ後のことには興味がわかない。緊急の問題としてパンツを脱ぐことさえできれば、今の彼女に叶えたい望みはない。何より、好意の対象へ奉仕することを信条とする彼女だが、自分の領分

を他人の方針や思惑で動かされるのが大嫌いなのだ。

「決めるのは、あなた自身よ。これは強制でもないし、決められたルールでもない。その選択を今決めるか、死んでから決めるかの違いだけ」

「モンテーニュいわく『運命は我々に幸福も不幸も与えない』だ。

「うーん、実は今このパンツを脱ぐのにハサミで切ろうと思ったんですけど。このパンツを切ったり破いたりしたら何か問題がありますか？ その、弁償とかじゃなくて、魔法的なトラブルとかで」

「べつに大丈夫よ。素材自体は普通の繊維だから、ハサミで切れるだろうし。それに、弁償も気にしないで」

「じゃあ、もしボクがここで契約を断る場合、何かされたりします？ 悪魔に関する記憶を消されたり、とか」

「いいえ。どちらにしろ、生きているあなたに危害をあたえることはないから大丈夫よ。あるとすれば、わたしがあなたの前からいなくなるくらいね」

「えっ、それは困るな」

「ここではじめて、ヨウコの天秤が大きく揺れる。天秤皿の傾きがへ取り返しのつかない死後の選択からへミキサンの存在へ動く。

「実をいうと、あなたには前からこちら側へ引き込めそう

人間として、目星をつけていたの。それが今この機会です。契約できないとなると、べつの場所ではかの人間を探さないといいけないし。そこで契約者が見つければ、わたしもその場所を動けなくなるから」

「それは、非常に困る」

ミキサンがいなくなるだけでもヨウコには大問題だが、さらに彼女をほかの人間に取られたうえ、契約者の望むままに色々なことをさせられるのだ。何も魔法に頼ることだけが望みの内容ではない。ヨウコの想像力が、むらむらと働く。

「じゃあ、たとえば契約したとして、後で気が変わったときに、その契約を破棄することはできますか？」

「そういう場合は、あなたの周りにいる大切な人間の中から、魂をこちらへ勧誘する身代わりとして、誰かひとりを選んでもらうことになるわね」

親兄弟、恋人、友人、大切な人間。その中から誰を身代わりにするかも、ヨウコ自身が決めるわけだ。

「うーん、ひとりいるなあ」

彼女が真っ先に思い浮かべたのは、ひとつ年下の元恋人イヌクンの顔だ。

早くに父と死別した彼女には、肉親と呼べる人間が母と兄しかない。そのふたりとも、今は遠く離れた北の大地で暮らしている。できのよい兄が結婚を機会に仕事先の土地に家

を建て、そこに母を呼び寄せたのだ。ひとりで関東圏に暮らすヨウコから見れば、家族を大切な人間と呼ぶにはいささか距離がある。

「あなたの恋人？」

「今は元だけど、まあ……」

ヨウコの方から「つき合いなさい」と告白して、ヨウコの方から「しばらく別れなさい」と突き放したのだ。それでもおたがい、ほかの誰かでは代用のきかない存在であることは変わらない。

ふたりの出会いは高校生時代にさかのぼる。それから十年來のつき合いになるわけだが、その間にはヨウコの中で他人に知られたくない情報が多く含まれる。単なる恋人同士の秘密という以上に、他言できない話が色々あるのだ。

「かけがえない人というわけね」

「いや、そんないい話じゃないけど」

ミキサンに読み取られないよう、ヨウコは思考を打ち切る。少なくとも身代わりとして差し出すさい、ヨウコが説得できる唯一の人間ではある。

「よし、契約しよう」

かくして、悪魔へ魂を売り渡した女がここに誕生する。ヨウコはあっさりとした口調で告げ、ミキサンを見返す。

彼女もまた「そう、ありがとう」と答え、ヨウコの顔を見

つめる。視線が真つ向から絡み合い、ミキサンは微笑を放射する。妖しさと快感、安らぎと悪戯を感じさせる、それでいて人間離れた正確な微笑だ。『モノリザの微笑』など比ではない。彼女に今「全部嘘よ」といわれても、ヨウコはそれを信じただろう。

そして彼女は、自分自身の体で悪魔の御技を目の当たりにする。

「上がらせていただいいいかしら？」

ミキサンは強制力のある疑問形でたずね、シャツの両袖を肘までまくりながら靴を脱ぐ。ヨウコは苦痛も相まって、首を縦に振る。アンモニアの小人たちが戸口で暴動を起こしている。

「もう少しだけ我慢して。すぐに下着を脱がせてあげるから」

ミキサンは床に両膝をつき、ヨウコの穿いたスウェットズボンを両手で掴み、下に脱がそうとする。その思いがけない行動に、ヨウコは驚いて腰を引く。

「えっ？ えっ、脱がせるってそういう方法ですか」

そうした直接的なやり方を想像していなかった彼女は、どきまぎと視線を下に向けろ。ひびきかいたミキサンの顔が、股間の前にある。

「ええ。魔法で下着の魔力を打ち消すには、ほかの服が邪魔

だから。とりあえず脱いでもらわないと」

「それなら自分で脱ぎます」

ヨウコは一歩下がって離れ、ズボンに手をかける。ひとりであるときは平気で裸になる彼女だが、他人に服を剥かれるのはやはり恥ずかしいのだ。相手が男性ならまだしも、同性に服を脱がされる経験は少ない。去年の春に知人の女性に誘われ、レズビアンコミュニティのオフ会に参加して以来である。

「これは……もう、パンツを脱がせるより、魔法で時間を止めてもらうとかしないと、もたないかも」

ズボンを脱ぐにも股間に重心をかけられず、両膝のバランスが微妙だ。

「それは難しいわね。時間そのものを止めることは、神にも悪魔にもできないことよ。できるとしたら、物体の動きに干渉して、少しの間だけ速度を遅らせることぐらいしか」

「それで時間を稼げますか？」

「ええ。時間系の魔法が使えるのは、悪魔の中でも魔神シエムハザイしかいないから、まず彼の協力が必要ね。ただ彼は隔離された特別な次元に住む存在で、そこへ行くために魔界にある十二の門を開く鍵が必要で——」

「あ、いや。取り消します。普通にパンツを脱がせてもらえばいいです」

まさかこういうオチか——と「ヨウコ」はズボンに次いでTシャツを脱ぎながら、不安を胸につのらせる。

「だいたい、そうよ。わたしはただの使い魔だから、この世界では簡単な魔法しか使えないの。大がかりな魔法を使いたい場合は、高位の悪魔や大いなる存在の魔力を借りないと駄目ね」

なるほど、そのたびに『神曲』のダンテが体験したような異界めぐりをさせられるわけだ——それもそうかと、ヨウコは脱力しながら納得する。過去に悪魔と契約した人間が、簡単に世界をひっくり返す願いことを何度も叶えていれば、もう少し今の社会が楽しいことになっていただろう。

「ブラはつけたままでいいですか？」

「大丈夫よ。本当は、上も着たままでよかったんだけど」

ヌードブラとパンツだけを残り、全部の服を脱ぎ終えたヨウコは、下着姿の体をミキサンに向ける。

「じゃあ、はじめのうけいいわね」

ミキサンは自己確認も含めてたずね、片手をのびして「ヨウコ」に近づく。

彼女の右手がヨウコの左胸に触れる。ぞくりと、頭皮の毛穴がすべて開く寒気に近い感覚がヨウコの体を走る。地肌に指先が触れた右手は、そのまま音もなく胸に刺し込まれ、手首のなかばまで体の中に埋まる。

「おおおう」

思わずヨウコの口から感嘆の声がもれる。物質透過。今彼女の中で、ミキサンはかなり悪魔的な存在だった。

「動かない方がいいわよ。痛みとか、気分の悪さとかは感じない？」

「うん。大丈夫」

手が体内を貫通しているというのに、ヨウコは不思議とも感じなかった。それが魔法なのだろう。見た目の違和感だけなら、男性の竿をはじめて入れられたときに似ていると彼女は思った。

「暗がりの城に仕える者・氷と灰・七つの首に連なる青き髪の一ひとふさ・退廃・四十五世界・二十二夜・白——」

「呪文、ですか？」

「わたしの名前みたいなものよ。これでああなたの魂に、契約の印が刻まれた」

ヨウコの目に一瞬、ミキサンの背中に広がる黒い羽が見えた。

「アリエガルタ・ルルカルル・セナ——はい、終わり」

彼女が右手を引き抜くと同時に、ヨウコの股間から一筋の黒い煙が糸のように細く立ちのぼる。それは見る間に勢いと量を増し、まるで見えない炎へ焼かれるように、彼女の穿いた黒いパンツが煙と共に消えてゆく。ミキサンが後に唱えた

方の言葉が、本命の呪文だった。

だが拘束が解かれたことで、ヨウコの戸口が急に緊張を緩める。

「ごめん、ミキサン。もう限界」

煙とパンツが完全に股間から消えぬまま、ヨウコはすぐ横にあるドアを開け、バスルームに駆け込む。

エチケツト空間——緑の茂る草原。白やピンクの花が咲き、羽を持つ蝶や虫が舞い、飛び立つミツバチが花を揺らし、緑の葉から朝露の水滴が落ちる——

そしてしばらく、がちやりと盛大な音を立て、バスルームのドアが開く。

「あー、すっきりした。酒が飲みたい」

外した眼鏡を片手に、ヨウコは爽快な表情を浮かべ廊下に出てくる。夏休みの子供が描いた絵のような笑顔だ。

ミキサンは玄関先で、花瓶に生け捕られた花のようにたたずんでいる。ヨウコはわずかに輪郭のぼやけた視界の中に、ミキサンを含む世界をとらえる。

問題が解決したヨウコの脳内を、今後の予定を並べたリストがつつらと流れ出す。残りの原稿を仕上げる。食事。部屋の洗濯物を片付ける。睡眠。ミキサンに願うことを叶えてもらう。

だが何よりも先に、ここで体験した非常識な事態の一部始

終をイヌクンに伝えてやるうとヨウコは思った。

*

その日の午後——

平日の昼を過ぎたファミリーストランは、ある種の異次元空間だ。

自我の発達していない子供を連れた妙齢の女性たちがエアコンに冷却された店内にはびこり、小さな町の噂と美味しいスイーツの情報が飛び交っている。

美容師にして悪魔であるところのミキサンと契約を交わし、黒いパンツの呪縛から解放されたヨウコは、途中の原稿を仕上げ、出版社の人間に引渡しを済ませた。それが午前中からお昼のことだ。

その間、ミキサンは契約者である彼女の望みを聞き入れ、部屋の洗濯物を丁寧に片づけていた。そして次に、食欲の望みを訴えるヨウコの願いを叶え、自家用車を走らせ、近所のファミリーストランへ連れて来たのである。万能の悪魔は車の運転もできるのだ。

「ひんう、ようすむにこの世界は、魂の選考会場ってことか」
テーブルにいたヨウコは、丸い平皿の中央に盛られた『チーズと茸の本格リゾット』をスプーンで崩しながら、向

かいへ座るミキサンの言葉に頷く。

「人間の肉体は、学校の制服みたいなものよ」

ミキサンは両手で球状のパンを持ち、それを一円玉ほどのサイズにちぎり、口へ運んでいる。パンを小皿に置き、アイスティーのグラスを持ち上げる。小鳥のように典雅な手つきだ。

「学校ねー」

いくつかのおなじ服を着せられた人間たちは、その制服を脱ぎ捨て、自らの決めた死後の進路へ進むわけだ——微妙に違う気もしたが、あまり事象を深く考えないヨウコは、目の前のリゾットに集中する。安物の雑炊もどきではなく、ご飯を固めに仕上げたリゾットは口にするとお米の歯ごたえが味わえる。

「でもさ。あらかじめ目をつけられていたってことは、ボクがそれだけ悪人だってこと？ あんまり自覚ないけど」

「魂の選択は、この世界の善悪とは無関係よ。あれは神側の連中が辺土に持ち込んだルールだから。善の定義を持ち込んだせいで、その裏面として悪の定義が発生しただけよ。魂の選択は、あくまで平等に本人の意思で決められるの」

「悪いことをした人間とか、良いことをした人間とか、それも関係なし？」

「基本的には関係なしよ」

すぐ後ろの席では若い女性ふたりが職場の愚痴をこぼし、少し離れた隣の席では頭の小さな少女がパスタと格闘し、母親にしかられている。身近で語られる世界の真理に、人々は無関心だ。

「あなた、生まれたての赤ちゃんが誰かに殺されたとしたら、その殺した人間を悪人だと思うでしょう？」

「それは、悪人じゃないかなあ」

「でもその赤ちゃんの父親が、ある独裁国の大統領で国民全員を苦しめていたとして、それを打開するために跡継ぎの子供を殺すしかなかったとしたら？」

ヨウコはリゾットの噛みしめながら、ふんうと考える。お米の食感、チーズの旨味、茸の香りが口の中に広がり、味覚が舌を包み込む。およそ十時間ぶりの食事は彼女の胃に充足感を与え、眠気を誘う。ヨウコは考えるのを止めた。

「どんな状況でも、子供を殺す奴は悪人だと思っ」

「たとえば、この世界の善悪も結局は個人の選択にゆだねられるという話よ。そうした善悪の外で動いているのが、わたしたち悪魔ね。神側が持ち込んだ善悪の定義は、わたしたちには無関係だから」

「なるほど」

制服指定の学校に、ひとり私服で登校する生徒を想像してヨウコは頷く。

「わたしの見込んだとおり、やっぱりあなたは理解が早いからね」

「まあ確かに、ボク向きかな」

リゾットを半分ほどたいたらけたヨウコは、かたわらに置かれた氷入りのグラスに手を伸ばし、よく冷えた『特製炭火焙煎コーヒー』を口に作る。

この店には何度か訪れ、お気に入りのリゾットをよく注文する彼女だが、本当に愛しているのはそのコーヒーだった。リゾットはコーヒーを味わう前に胃を刺激するための前戯に過ぎない。

「じゃあ結局、神と悪魔の戦いつてなんなの?」

「そうね。詳しい説明できないけど、単純にいえば定義の違うふたつの存在が闇と光に分かれて、永遠と勝ち負けをくり返しているだけの話よ」

「ずっと前から?」

「ええ、わたしの知る前から」

「前は勝ったのはどっち?」

「勝ったのはわたしたち。今回の戦いははじめたのは、あっち」

「そうか。悪魔が勝ったんだ」

コーヒーの刺激で、いくぶん脳の活動を戻したヨウコは神と悪魔の戦いに想像をさせる。だがいかんせん、想像を

絶する内容である。悪魔が勝ったと聞かされても、イメージがおよばない。

「悪魔が勝てば、世界は大いなるひとつの闇に満たされる。わたしたち悪魔は闇に帰帰して、無の安らぎを求める存在」

「うーん、うん」

「悪魔の勝利後、長い時間の果てに、世界を満たす闇の中から独立した個の意思が生まれた。やがてそれは存在を拡大させて闇から切り離され、個は光を持つ神側の存在として再び戦いはじめたというのが、わたしの知る世界の話」

ミキサンは何気ない表情で神託の「こくお」そかに告げ、アイスティーのストローをわずかに吸い、口を離す。

「闇が個を切り離れた瞬間、その存在はばらばらの魂に分解され、闇の残滓から生まれた辺土と肉体の中に降り注がれたわけ。そしてまた最終的にはどちらかの勢力に大分されて、次なる世界の支配権をかけて争う。おそろく後にも先にも、そのくり返しよ。ずっとね」

「果てしない話だなあ」

ヨウコはアイスコーヒーを飲み干し、はあと満足そうに息を吐く。

「じゃあさ、キリストとか仏陀とかいう昔の神っぽい人たちは——」

彼女がさらなる禁断の問いへ知識を伸ばそうとした瞬間。

スウェットズボンの中に入れられた携帯電話が捕獲された動物のように、ぶるぶると暴れた。

ヨウコは天からのメッセージを受け取る思いで携帯電話を取り出し、画面を開いて確認する。

表示されたのは「メールを一件受信しました」の文字。送信者は彼女の元恋人イヌクン。先ほどヨウコが出したメールに対する返信だった。

「悪魔と契約したんだけど、とりあえず何をやればいい？」
「ミキサンとの契約後、彼女が冗談のように一文のメールを出したのだ。ヨウコはボタンを操作する。」

「Re・ねえ、イヌクン／『ファウスト』の岩波文庫版でもよければ、貸しましょうか？」

それは彼女の趣味を彼なりに考えたすえ、送り返された文章だった。ヨウコはメールの内容に思わず笑みを浮かべ、空っぽのグラスを手にして席を立つ。愛すべきコーヒーのおかわりをもらうため、ドリンクバーへ向かうのだ。

食事を終えたらシャワーを浴びて少し眠る。仕事明けの夜には、イヌクンが彼女の部屋を訪れる。平日だが、ヨウコが呼び出せば彼は来る。そこにはミキサンも同席するだろう。その場で元恋人に全てを明かすときの楽しみを考え、世界の真理と寝不足と食欲を詰め込んだヨウコの脳がとろけ出す。

かくして彼女の世界は、非常識と愛に満たされてゆくので

ある。

※作中の一部にて「悪いひとたち」および「SWEET DAYS」(フランク・ジェット・シティー)の歌詞を使用させていただきました。